学位論文の要約

論文題目　近代ドイツ文学における「フォルク」概念の諸相
——クライスト、ゲレス、アイヒェンドルフ

申 請 者　須藤秀平

論文要約

本論文は、近現代ドイツ思想における最重要概念の一つである「フォルク（Volk）」が19 世紀初頭のドイツ文学のなかでどのように捉えられたか、そしてそこには作家のどのような問題意識が反映されているのかを考察するものである。

ここで扱う「フォルク」とは、通常「民族」あるいは「民衆」と訳される言葉であるが、それは近代国民国家の形成が遅れていた 18 世紀後半のドイツ語圏地域で、来たるべき国民共同体の基盤を成す重要な概念となった。とりわけイギリスの産業革命やフランスの政治革命に由来する社会構造の変化に対し、ドイツ特有のアイデンティティが模索されるなかで、「フォルク」は称揚され、理想化されていった。それまでは単なる「下層民」を表す言葉であったフォルクは、一つにはヨーロッパの諸外国に対抗し、固有の文化や歴史にもとづく「ドイツ」を確立させるための概念として（民族）、もう一つには「近代」の持つ負の側面、すなわち生活様式の極端な合理化や均質化といった悪弊を被っていない純粋な生を体現するものとして（民衆）、新たな意味を獲得したのである。

もっとも、こうした「下層民」から「民族」あるいは「民衆」へというフォルク概念の格上げは、かならずしもなめらかに進んだわけではない。だが従来の研究では、特にナチズムの源流を批判的に探る試みにおいて、「民族」の理想化過程がしばしば「ロマン主義」と結びつけられ、それにより 19 世紀初頭の言説が一面的にのみ捉えられることも少なくない。それに対し、本論文では、19 世紀初頭における「フォルク」の多義性、もっと言えば、当時の作家が「フォルク」という言葉を用いながら、しかし理想化された「民族」や「民衆」の概念と一括りにできない形で表現した部分に着目し、そこに見いだされる彼ら

の「フォルク」へのアンビヴァレンスとその意味を探った。

本論文は、大きく分けて三つの部分から構成される。第 1 章と第 2 章はクライスト、第 3 章と第 4 章はゲレス、第 5 章と第 6 章はアイヒェンドルフに関する考察にそれぞれ当てられている。

第 1 章では、クライストの初期の手紙を対象に、身分制および革命に対するクライストの態度と彼の自己意識について論じている。そのうえで短編小説『チリの地震』を読み解き、そのなかで「フォルク」が下層民ではなく「群衆」として特別な意味を持つことを明らかにしている。第 2 章では、対仏戦争を鼓舞するために書かれたとされる戯曲『ヘルマンの戦い』を中心に、クライストのナショナリズム的思考の内実が考察される。ここでもクライストの特殊なフォルク観が、「群衆」をキーワードにして明らかにされる。

第 3 章では、ゲレスの 1790 年代の活動から、彼がジャーナリズムにおいて「フォルク」に期待した役割が示される。ここでは「共和主義」の立場に立つゲレスが「市民」と「民衆」の架橋をどのように図ろうとしたのかが問題となる。そしてここで示したゲレスのフォルク観が 1806 年以降の民衆文学への取り組みにおいても引き継がれていることを明らかにするのが第 4 章の目的である。ここではハイデルベルクにおけるロマン主義者であるアルニムやグリム兄弟との比較において、ゲレスの「民衆本」構想の特殊性が導き出される。

アイヒェンドルフを対象とする第 5 章と第 6 章では、解放戦争時代とその後の 1830 年代という二つの時代における社会状況、とりわけ文学をめぐる状況の変化が重要なテーマとなる。第 5 章では解放戦争時代の長編小説『予感と現在』のなかでアイヒェンドルフが示した理想の詩人像と、それに関連づけられる「フォルク」の役割が論じられる。最後の第 6 章では、1830 年代という特殊な時代状況のなかでアイヒェンドルフがとった立場とその意味を、解放戦争時代と 1830 年代という二つの時代の比較を通じて考察される。

これらの考察によって本論文が明らかにしたのは、クライスト、ゲレス、アイヒェンドルフの三者がいずれも国民共同体としての「ドイツ」の創出を目指しながら、それでも「フォルク」を政治イデオロギーのための概念として用いるのではなく、共同体の内実を成す多数者とみなしたうえで、期待される潜勢力あるいは危険性をそこに見出していたということである。そのとき彼らにとって「フォルク」とは、単に多数の人間から成る集団であるというだけでなく、文学や言論を〈受容する存在〉としての意味を持っている。そして、その機能こそが彼らの考える共同体像を大きく左右するのである。

クライストは「フォルク」に情報を媒介し、さらには他者を評価・承認する集団としての意味を与えた。クライストにおける「フォルク」はしばしば「世論」と重ねられるが、その「フォルク」は他者への評価を「声」として表明することで、他者に対する暴力をももたらしうる。その影響は共同体全体にまで及び、それにより一国の統治者もまた「フォルク」の承認を求めることに尽力しなければならない。そして仮に統治者が「フォルク」による承認を首尾よく得ることができる場合でも、そのとき生じる集合的意志が統治者の当初の目論みと一致しているかどうかは定かではない。

それに対し、ゲレスは「フォルク」の持つ監視者、ひいては判定者としての機能を肯定的に捉え、それをジャーナリズムおよび民衆本との取り組みによって積極的に促そうとした。とはいえゲレスの活動はあくまで「市民」の側からなされたものであり、「フォルク」の「声」を間接的に取り込むことが彼の構想の要であった。その点ではゲレスもまた「フォルク」に対する怖れを抱いていたとみなすこともできる。

一方のアイヒェンドルフは「フォルク」に市民的俗物へのアンチテーゼとなることを期待したが、それは自ら「詩作する」ようにして文学を受容するという理想的読者の姿を「フォルク」に重ねたからであった。アイヒェンドルフは文学が大衆の娯楽となった時代に、彼が考える真の「読者」像を提示し、そこから同時代の社会状況を批判した。しかし、「フォルク」をまさに受容者と捉えたことにより、1830 年代の政治状況の変化のなかでアイヒェンドルフの理想は揺らぎ始める。

本論文が明らかにしたこれらのフォルク観によって、少なくともクライスト、ゲレス、アイヒェンドルフの三者が無自覚に「フォルク」を理想化し、それによりドイツ・ナショナリズムの成立・発展を促したという見方は退けられることとなる。彼らは「民族」として一つの理想に収斂されるものとは異なるフォルク像を提示しており、その意味では「大衆の国民化」（G・L・モッセ）を促進するどころか、むしろそれに逆行していた可能性すらある。

そして、こうした受容者および判定者としてのフォルク観は、おそらく彼らに限定されたものではないだろう。19 世紀初頭のナショナリズムとフォルクの関係を考察するためには、フォルクのこうした側面を見落とすわけにはいかない。その際、本論文が明らかにした三者のフォルク観は、国民の範囲や公共圏の形態が複雑に変化する 1800 年前後の時代における社会像を正確に捉えるための手がかりとなるだろう。